

第9回：2021年の抱負

武田 悠作

人類が未曾有の危機に直面した2020年を私は「準備」の年と位置づけた。主に研究パイプラインを充実させ、磨きをかけることに時間と労力を費やした。2021年になり、その成果は徐々に現れてきている。いくつかの学会で受賞することができ、分野内でも（まだまだ未熟ながら）少しずつ認知されてきた。何よりも、研究者としての自立心が高まってきた。総合的に、博士課程の次のステージへ進む万全の準備が出来てきた実感がある。

2021年は重要なキャリアの分岐点となるだろう。「準備」の昨年と打って変わり、今年の私の決意は、「攻める」ことだ。今秋ついにアシスタントプロフェッサー職の就職活動が始まる。そのため、今年はこれまで温めていた論文を次々にジャーナルに投稿することに集中してきた。その結果は今のところ良好だ。最近、これまで出版を夢見ていたジャーナルからリバイズ&リサブミットの依頼も受けた。比較的広範囲の改訂になりそうだが、最終的な出版にこぎつけることは十分可能だろう。

ここまでの2021年は、俯瞰的に自分がどのような研究者になりたいのかを考える重要な時期でもあった。次の10年をどのように過ごしたいのか？この検討には、(1)これまでの自分の情熱や興味を振り返ることと、(2)これから、どのような課題に取り組むことに意義を感じるのか、という将来への想像力を統合することが必要だ。やはり、明確なビジョンを描くのは確かに難しい。ひとつだけ確かなことは、少なくとも次の10年間は、常に知的好奇心を刺激され、研究者として成長できるような環境で過ごしたいという思いが強い。これまでの自分への投資を還元するというよりは、もう少し自分へ投資していきたい考えだ。これまで5年間の博士課程で基礎は叩き込んだが、これから30年・40年のキャリアで最も重要なのは次の10年なのではないかと感じている。

ビジネススクールの教員は、研究だけではなく様々な業務が求められるが、その多くは研究に直接結びつかない。例えば、ハーバード・ビジネス・スクールでは、修士課程の学生や経営者への指

導、雑誌や書籍などの出版物の発行、ケーススタディなどの教材の執筆など、研究の妨げになりかねない負担もある。私自身は、大半の時間とエネルギーを研究に費やすことができる場所で次の10年を過ごしたい。それができる最高の環境を見つけること、それをものにすることが2021年の残りの目標だ。

武田 悠作 (たけだ ゆうさく)



経営学者。ハーバード大学経営大学院 博士課程研究員 (Ph.D. 課程)。北海道新ひだか町出身。北嶺高等学校 (札幌市)、ウェズリアン大学 (コネチカット州) 卒業。ニューヨークの IT 関連会社勤務、一橋大学にて野中郁次郎名誉教授の助手として知識経営論研究に従事後、船井情報科学振興財団より支援を受け、2016 年より現職。企業の技術革新や戦略設計のプロセスを形作る認知メカニズムを社会認知論の視点で研究している。趣味は柔道 (参段) と昆虫採集。

ウェブサイト：www.yusakutakeda.com